

開催地名：東京都国分寺市	
開催日時	令和元年 10 月 3 日（木） 14：00 ～ 15：30
開催場所	cocobunji WEST リオンホール
語り部	島田 福男 （宮城県仙台市）
参加者	国分寺市民防災推進委員会、自主防災組織 約 60 名
開催経緯	当市では、地区防災計画を策定している地区が 13 地区あり、2 地区が策定中である。しかし、過去に大きな災害に見舞われたことがないため、実体験に基づいた計画ではない。このことから、実災害が起こった際に計画に基づく活動ができるのか不安である。また、避難生活で食事や物資（水や燃料等）の確保等の有効な備えがどういったものか、具体的にイメージがついていない。このあたりについて、語り部から参考になるお話を伺いたい。
内容	（１）町内会での防災活動 昭和 53 年の宮城県沖地震を受けて、自主防災組織の結成を促した。私の町内会でも組織を結成したが、1、2 年で役職が変わってしまうので、平成 12 年に町内会長になった時には組織が殆ど機能していなかった。これではまずいということで、地区の複数の町内会と連携して連合町内会を改めて組織し、その中に自主防災組織を作った。そして、平成 19 年に川平地区連合町内会自主防災向上計画を策定した。昭和 40 年代の大規模住宅団地開発により形成された川平地区は、急速な高齢化が進んでいたため、この計画を基にして各町内会の自主防災を徹底してくれとお願いをした。毎月 1 日を「防災の日」と定めて、150 本ののぼり旗を掲げる。ビブスも 150 着購入し、防災訓練の時などに役員に着用してもらうようにした。その他、300 万円の予算で防災の資材、機材の購入をした。（発電機やリヤカー、炊き出し用大鍋等）それらは公園の倉庫等各所に置いて、すぐに利用できるようにした。平成 22 年には川平地区防災対策連絡協議会を設立して、毎月最終日曜日に定例会を開いたり、分科会を設けて話し合いをし、その話し合った内容を共有していくことを 1 年間続けた。そして、その矢先に東日本大震災が発生した。 （２）地震発生時の状況 揺れがおさまった後、対応計画に従って近所へ安否確認に赴いた。結果全員無事だったが、管轄地域内で地割れや水道管の破損が相次いで起こったため、その対応にも当たった。それと同時に、小学校に対策本部も設置し、町内会に照明用の発電機、投光器、燃料用のガソリンの設置も行ってもらった。その中で、まずは避難所の中を明るくすることで、何度も襲って来る余震の揺れに対しての不安を軽減することができた。もう一つは「避難者カード」を発行して、避難所の

運営はそのカードに基づいて運営を行った。その運用の仕方としては、外出する際にはカードを所定の場所に置いてもらい、戻ってきたらまた戻す。食事の配給の時もそのカードに従って呼び出しをかける。そうすることによって、避難所での混乱を防止することができ、本当に静粛に静かな運営をすることができたと思っている。

その他、震災翌日より、救援物資の配給要請をした。しかし、道路をはじめとして交通網は既に寸断されていたので、受け入れを待っていては時間ばかりが過ぎてしまうと判断し、まずは役員にガソリンスタンドへ行ってもらい、発電機用と物資運搬車用としての燃料の確保と、避難所で使う暖房用の灯油の確保を行った。同じく、食糧などについては地元大手スーパー 3 社に行って優先的に分けて欲しいとお願いをしたところ、快諾いただいた。そうする中で、3 月 14 日には地域内の電気が復旧して、大量の避難者が自宅に戻ることができた。その後、2 日後の 3 月 16 日には避難所を閉鎖することができた。恐らく仙台市内の避難所の中では、かなり早い段階で閉鎖することができたのではないかなと思う。ここまでスムーズに運営できた大きな要因の一つに、先に挙げた防災連絡協議会の活動に基づいた地道な活動を、1 年間続けていたことが挙げられると思う。

(3) 地震後変化したこと

この大震災を受けて、様々な課題が浮き彫りになったことも、今後に向けては見逃すことができない。まずは行政と地域の連携を密にしなければならないということだ。これについては、震災当日に避難所を直ちに開設するしないで行き違いがあり、対応が若干遅れてしまった。次に、行政に対して「非常用電源の確保」、「トイレの洋式化」の 2 点のお願いをした。また、仙台市ではそれまで一括だった地域防災計画が、エリア単位に見直され、現在では市内 193 カ所の指定避難所ごとのマニュアルが完成している。



開催地より

自主防災組織の活動について、非常にわかりやすく説明していただいた。今後の活動に役立てていきたいと思う。